

長野大学での日本語教育

—1993年度から1996年度までの4年間を振り返る—

A Field Report of Teaching Japanese at Nagano University from 1993 to 1996

金子 泰子*

Yasuko Kaneko

目次

はじめに

I 長野大学での日本語教育の経緯

- 1 教務課関係
- 2 学生課関係

II 日本語授業の実際

- 1 「日本語特別コース」受講生一覧(1993年度から1996年度まで)
- 2 クラス分け
- 3 使用テキストおよび補助教材
- 4 授業の概略
 - (1) 日本語Ⅱ
 - (2) 日本語Ⅰ(A・B)
 - (3) 問題点
 - (4) 提案事項

5 日本語教室通信「心の声」発行の経緯とその意義

6 教室外研修授業の実施

III 地域の日本語教育の動向

IV 大学と地域の日本語教育

- 1 県下の情勢
- 2 留学生会の結成
- 3 地域の日本語教育活動の拠点に

おわりに

はじめに

長野大学で、留学生を対象とした日本語の授業

が開講されて4年が過ぎた。当初よりその授業を担当した教員として、主に、授業の実際を振り返りながら、長野大学での日本語教育の課題と問題点を探りたい。

I 長野大学での日本語教育の経緯

1 教務課関係(教務課の津田主任より資料の提供を受けた)

1992年(平成4年)度より、外国人留学生(学部)入学制度が開始され、初年度には2名の合格者が出ている。

1993年(平成5年)度には、長野大学のカリキュラム改革に伴い、一般教育課程の外国語コースに「日本語特別コース」(筆者は、この講座担当として、この年より採用され、現在に至っている。)が設置された。このコースは、外国人留学生のみを対象とし、学部留学生には必修科目として指定されている。(対象は学部留学生二期生以降。)

学部留学生氏名・出身国一覧

1992年度第一期学部外国人留学生

産業社会学科	張 艶玲	中国
産業情報学科	楊 巧鳳	中国

1993年度第二期学部外国人留学生

(日本語特別コース受講は二期生以降)

産業情報学科	タン・ヨッケ・ピン	マレーシア
--------	-----------	-------

*非常勤講師

産業情報学科 唐 斌 中国
1994年度第三期学部外国人留学生

産業社会学科 楊 蕊竹 中国

産業社会学科 曾 鈺 中国

産業情報学科 陳 浩 中国

1995年度第四期学部外国人留学生

産業社会学科 胡 春燕 中国

社会福祉学科 吉 愛蘭 韓国

1996年度第五期学部外国人留学生

産業社会学科 劉 濤 中国

産業社会学科 方燕 (二学年次編入)

中国

産業情報学科 鄭 晨 中国

社会福祉学科 何 嘉静 中国

また、かねて日本語能力に関する諸問題が指摘されていた外国人研究生、聴講生に対しても（特に聴講生については、長野大学の講義が全て日本語で行われていることから、必ず）履修するように指導されている。

「日本語特別コース」開講に伴い日本語教育資

金として、初年度には、日本語教材ビデオ（留学生用）に10万円、以後、1994年度からは毎年、日本語教育用図書費として10万円、同教材費として10万円、計20万円の予算がついている。また、1996年度には、八十二銀行奨学金10万円が日本語教育費用として附属図書館より交付された。例年図書館から各講座に交付される図書費ともあわせ、これらの全てをもとに、日本語担当教員の金子が日本語教育参考図書を選定、収集している。

2 学生課関係（学生課の吉岡課長より資料の提供を受けた）

平成4年度以降、次のような目的で、「留学生との懇談会」が開催されている。

目的：留学生は、他国の地ゆえ、言語、風俗、習慣などの違いからさまざまなハンディーを背負っての勉強であり、大変な苦勞をしているものと思われる。

そこで、本学としても、留学生諸君に対して履修や学生生活面における支援と激励をねらいとした懇談会を関係教職員の出席を得て開催することとしたい。

開催日・場所および出席人数

年度・回	日時・場所	対象学生数		留学生参加者数
平成4年 第一回	7月8日 第一集会室 5:30PM	学部生 2名 研究生 19名 聴講生 13名	計 34名	不明
平成5年 第二回	6月10日 第一集会室 3:00~5:00PM	学部生 4名 研究生 15名 聴講生 13名	計 32名	13名
平成6年 第三回	7月14日 第一集会室 3:00~5:00PM	学部生 7名 研究生 17名 聴講生 13名	計 37名	27名
平成7年 第四回	11月16日 第一集会室 3:00~5:00PM	学部生 9名 研究生 14名 聴講生 5名	計 28名	17名
平成8年 第五回	7月25日 第一集会室 3:00~5:00PM	学部生 11名 研究生 5名 聴講生 3名	計 19名	18名
第六回	平成9年1月16日 第一集会室 1:30~3:30PM			9名

外国人留学生との懇談会の内容例

平成6年度 第三回懇談会

日時 平成6年7月14日(木)

会場 大学会館 第一集会室

出席者 留学生

指導教員

教職員

次第

開会

- 1 学長あいさつ(理事長・安井先生)
- 2 自己紹介
 - ① 教職員
 - ② 留学生 氏名・出身地・留学目的など
- 3 諸連絡

医療費補助制度についてほか
(優待券、連絡方法など)

4 懇談

学生生活の現状ほか

閉会

懇親会 5:00PM以降

この懇談会には、二回目以降、日本語担当の教員として筆者も出席の機会を得た。当初は年に一回ということもあり、留学生の方にやや堅さが見られた。が、回を重ねるごとに、留学生の方にも懇談会についての理解が深まり、疑問点や質問点を提出するなど、積極的な参加姿勢が認められるようになった。このような会は、何よりも継続されることに意義がある。形骸化を避け、自由な雰囲気できれいに質疑応答が出来るようにすることが望ましい。とりわけ、厳しい経済状況の中で勉強を進める私費留学生たちは、奨学金取得が死活問題であり、その制度や運用に関しては明快な判定基準を求めている。

なお平成8年度の懇談会から、学生自治会からの日本人学生の参加があった。懇談の後、「長野大学にこんなに留学生がいるとは知らなかった」との感想を聞くにつけても、長野大学での、一般日本人学生と留学生との交流の無さが伺えた。今後、自治会からの参加を継続しつつ、何らかの形で、よりよい方向が見いだされていくことを期待したい。

学内の行事予定はもとより、外部団体からの奨

学金の募集や国際交流行事への参加案内など、留学生との間の諸連絡が、学生課の重要な仕事の一つになっている。また、外国の慣れない土地で暮らす留学生の生活全般にわたる世話をするのも、学生課の仕事である。

学生生活を充実させるためには、なにより健康管理が欠かせないが、慣れない土地でのこと、とりわけ、冬場には、外国人留学生の事故や病気が目立つ。日本語の授業を担当しながらも痛切に感じることは、落ち着いた生活があってはじめて、落ち着いて勉強に取り組むという事実である。その意味でも、留学生の生活に学生課が果たす役割は甚大であると痛感する。

II 日本語授業の実際

1 「日本語特別コース」受講生一覧(1993年度から1996年度まで)

1993年度

日本語 I A

(聴講生) 徐林、韓星澤

(研究生) 張経緯、譚鋒、雷新華、李永偉、趙一紅、成小星、董金榮

日本語 I B

(学部生) 唐竑、タン・ヨッケ・ピン

(聴講生) 劉慶淋

1994年度

日本語 I A

(聴講生) 徐富貴、張鳳、邱燕麗、魏紅華、王玉梅、馬軍

(研究生) 牛増強、王成驥、李欣、向武、王劍

日本語 I B

(学部生) 楊蕊竹、曾鈺、陳浩

(研究生) 張経緯、徐林、韓星澤、李永偉、趙一紅、譚鋒、余若蘭

日本語 II

(学部生) 唐竑、タン・ヨッケ・ピン

(聴講生) 習紅蓮

1995年度

日本語 I A

(聴講生) 潘明達、程勤

日本語 I B

(学部生) 胡春燕、吉愛蘭

(研究生) 牛増強、徐富貴、張鳳

(聴講生) 鄭晨、劉桂綱

日本語Ⅱ

(学部生) 楊蕊竹、曾鈺、陳浩

(研究生) 徐林、向武、陸彤

1996年度

日本語ⅠA

(聴講生) 張慶捷、俞斌、吳江濱、王珩乾

日本語ⅠB

(学部生) 方燕、劉濤、鄭晨、何嘉靜

日本語Ⅱ

(学部生) 胡春燕、吉愛蘭、曾鈺(再履修)、
陳浩(再履修)

2 クラス分け

1996年(平成7年)度からは、日本語Ⅰのクラスを、明確に、学部留学生クラスBと、聴講生・研究生クラスAに分けるようになった。実質的には、学部留学生は一年次に日本語ⅠBを受講し、二年次には日本語Ⅱを受講する。一方、聴講生は日本語ⅠAを一年間、その後、研究生に進んだ学生は日本語ⅠB、日本語Ⅱを、学部生といっしょに履修することになる。聴講生を一年済ませた後に長野大学に学部生として入学した学生についても、同様に、日本語ⅠBから日本語Ⅱへと進むことになる。

日本語Ⅰの授業は、開講二年目(1994年度)からすでに、ふたクラスに分けて行っていた。中国本土から直接留学してくる学生については、事前にその日本語力をはかることは困難であり、来日後判明した結果によって、初級入門レベルの学生に、日本語ⅠAを当てざるを得なかったこともある(1995年度)。また、中級、上級レベルの日本語力を有する聴講生、研究生については、適宜、学部生といっしょに日本語ⅠBか日本語Ⅱを受講させることもあった。

開講当初は、中国から直接、新学期にあわせて来日する学生が多かったのだが、最近では、日本語学校で一年から一年半日本語を勉強してくる学生が多く、日本語能力のレベルも一定して、中級のはじめに位置する学生が多くなってきている。年齢的にも、かつては、大学を卒業してしばらくしてから、または、社会人として長年続けてきた仕

事をなげうって留学してきたという30代の学生が多くいたが、最近では、高校卒業後の10代での来日学生が多い。

長野大学の留学生は中国出身者が多く、日本語学習歴の短いものでも、ある程度漢字が読めることから、筆記のプレースメントテストだけで、正確にクラス分けをすることは難しい。読み書き能力と話す聞く能力が大きくかけ離れている場合が多いからだ。開講当初に試みたプレースメントテストは止め、最近では、2、3度授業に参加させて様子を見ながら、総合的な能力を見極めてクラス決定をすることになっている。

日本語能力試験一級を受験している留学生の場合、その点数により、ほぼ間違いなくクラス分けが出来る。

3 使用テキストおよび補助教材

日本語ⅠA

・『文化初級日本語Ⅰ』

文化初級日本語録音テープ

『文化初級日本語Ⅰ 練習問題集Ⅰ』

『楽しく聞こうⅠ』 文化初級日本語聴解教材

文化外国語専門学校

日本語教育映画基礎編 ユニット1・2・3

国立国語研究所

あうんでいこう! コミュニケーションのための
日本語ビデオ教材 全4巻

日向茂男ほか、異文化教育研修所隣館企画
New 絵カード全6シリーズ 鈴木出版

日本語ⅠB

・『文化初級日本語Ⅱ』

文化初級日本語録音テープ

『文化初級日本語Ⅱ 練習問題集Ⅱ』

『楽しく聴こうⅡ』 文化初級日本語聴解教材

文化外国語専門学校

日本語教育映画基礎編 ユニット4・5・6

国立国語研究所

『ドラえもん ことわざ辞典』

栗岩英雄著 小学館

あうんでいこう! (同上)

日本語Ⅱ

・『日本語表現文型Ⅰ・Ⅱ』 筑波大学日本語教育
研究会(1993年度より1995年度まで)

(ⅠとⅡを一年ごとに交互に使用。再履修の留
学生を考慮して)

・『文化中級日本語Ⅰ』（1996年度より採用）

文化中級日本語Ⅰ録音テープ

『文化中級日本語Ⅰ 練習問題集』

文化外国語専門学校

『日本語中級Ⅰ 練習帳—文法その他・漢字—』

国際交流基金 日本語国際センター

『おぼえておきたいいきまりことば慣用句辞典

まんがで学習』 内田玉男著 あかね書房

4 授業の概略

(1) 日本語Ⅱ

日本語Ⅱのテキストを1996年度より新しい物にした。週に一度の補修の授業で、学生に興味を持続させながら語学の勉強を進めるのには、かなりの工夫がある。筑波の『日本語表現文型中級』は、文型・文法の項目もよくまとまり、練習問題も豊富でよいテキストだったがテープや補助教材はないので、興味付けのためのビデオやゲームなどの準備に苦労しながら授業を進めた。

新しく採用した『文化中級日本語Ⅰ』は、テキストの中に、読む、書く、聞く、話すの四つの技能と、それぞれに対する豊富な教室活動がバランスよく組み込まれていて、飽きがない。新しく発行されたばかりだということもあって、話題も新鮮で興味が持てた。また、進むスピードを適度に変えたり、部分的に学習項目を省いたりしても、十分に自学できる形態になっているので、扱いやすい。難をいえば、付属の練習問題集をもう少し充実させてほしいという点である。文法項目の定着度が確認できる程度の問題量になれば、家庭での復習にも効果的に使えるだろう。

漢字と文法力の強化に、「日本語中級Ⅰ」（日本語国際センター）付属の練習帳を活用している。テキストに沿った内容だが、テキストを使用しなくても練習問題としてだけでも十分に活用でき、内容にも偏りがなく、バランスよく学習項目が含まれているので、今までの日本語学習の復習としても便利に使える。

日本語Ⅱは学部2年生が主たる対象なので、他の授業に参加して気後れすることのないように、なるべく留学生自身に話させるチャンスを多くし

ようと心がけている。演習形式を取り入れ、あらかじめ決めておいたテーマに従って、教壇に立ってスピーチをさせたり、調査項目の発表をさせたりすることもしている。

また、レポートをはじめとする種々のジャンルの文章の書き方はもとより、スピーチに関しても、指導すべき点はいくつかある。出身国で彼らが受けてきたであろう教育内容なども探りながら、日本で学び続ける彼らにふさわしい文章表現力を伸ばしていきたいと考えている。

テキスト以外には、日ごろ日本人がよく使ういきまりことばを取り上げて学習している。日常生活には不便なく生活している日本語Ⅱの受講生たちだが、細かな部分で、耳慣れてはいるながらもはつきりとは理解できていない表現も多く、慣用句の学習は楽しみながら進めている。中級の後期に位置すると考えられる彼らは、細かな言葉のあやにも気づき始めるし、その説明も日本語で上手に出来るので、慣用句の学習を始めるには、ふさわしい時期であるといえるだろう。

(2) 日本語Ⅰ

日本語Ⅰの授業では、入学してくる学生の日本語力があらかじめ測れないことを考慮して、挿し絵が多く、補助教材の整っている『文化初級日本語Ⅰ、Ⅱ』を採用してきた。が、近年、日本語学校ですでにこの教科書を終えてくる学生が多く、また、これ以外でも、主立った総合教科書（「新日本語の基礎」なども）はこの日本語学校でも採用している。思い切って、国立国語研究所のビデオ教材だけで授業を組み立ててみようと思ったのだが、テキストがないと不安だという学生の声におされて、まだ実行できていない。

1993年度から1995年度までの3年間の経験を生かして、初級でマスターしきれない文法項目を要領よくまとめたテキスト「日本語初中級—理解から発話へ—」（名古屋YWCA教材作成グループ著）を見つけたので、次年度（1997年度）からはこれをメインのテキストに採用しながら、ビデオ教材も活用して授業を進める計画でいる。

① 日本語ⅠA

ⅠAの授業では、体系的な基礎文型の習得と語彙の拡大を主な目的として、テキストに沿って学

習を進める。一方で、来日間もない留学生のことも考慮して、大学生活への理解を広げ、居住地でもある上田地域にも早く慣れるように、時季に応じた身近な話題を取り上げながら授業を進める工夫をしている。

② 日本語 I B

I Bでは、表現能力を強化するために、ことわざの学習を取り入れている。日本語のことわざには、中国から伝わったものも多く、また、どこの国にも、よく似たことわざというものは存在するので、出身国のよく似たことわざを紹介しあいながら学習を進めている。他国の言語を学ぶことは、自国の言語をよく知ることにつながるということを再認識しながらの学習になっている。

留学生は、大学や地域では、出身国の代表としてみられることも多く、日本人に自国の文化を説明する機会も多いと推測できる。日本語教室でのこの学習経験が生かせればと願っている。

(3) 問題点

① 日本人の友人が出来ない

留学生に日本人の友人が出来ないのが、大きな悩みである。とりわけ研究生については、聴講生の期間から含めると、3年間にわたって長野大学に在籍するにも関わらず、帰国するまで、だれ一人日本人の友だちを見つけられなかったと告白して帰国する学生もいる。日常的に関わりあえる日本人の友だちがいれば、話し言葉のレベルでは大きな助けになるのにと、残念でならない。

② 出席率、授業態度

ほとんどの留学生が夜のアルバイトをしている実状から、常に疲労感に満ちており、生活のリズムも不規則である。出席率の低さに加えて、遅刻や授業中の居眠り、宿題の未提出など授業態度も芳しくない。しかし、「アルバイトを少しでも減らしたら」「もう少し自由になる時間があれば」という悲鳴にも近いことばを聞くにつけても、彼らのこのような授業態度を一概に非難することもできない。

なかでも聴講生の日本語授業への出席率が低い。クラスで、同じテキストを使用して授業を進める場合、不規則な受講は、クラス運営にも支障を来すことが多い。しかし、多くの聴講生は、在

籍期間一年のうちに、次年度の進路を決定しなければならないという悩みを抱えている。進学を控えて、日本語能力試験や私費外国人留学生統一試験の受験準備にも追われている。学部生の就職問題と同様に、これらの聴講生についても、受け入れ大学として、細かなニーズ分析と適切な進路指導が必要なのではないかと感じている。近年、音楽や絵画に興味を持つ学生が長野大学の聴講生として、産業情報や社会に関する講義を聴講している姿を見るにつけても、受け入れ時点での問題点を考えずにはいられない。

③ 事故や制度面でのトラブル

真冬の凍結期の、自転車やバイクでの通学には例年、冷や冷やさせられる。心労から来る慢性の腰痛や、アルバイト現場での骨折や火傷など、留学生の心身上のトラブルはあげればきりがないほどである。日本で医者にかかっても、うまく症状が説明できず、結局適切な治療も受けないまま、かえって悪化した症状で帰国した学生もいる。高額な治療費に恐れをなしているようでもある。

落ち着いて実り多い留学期間を過ごすためには、医療面での細かなサポートが欠かせない。経済面での援助に加えて、日本の医療機関に関する細かな情報提供が必要だろう。この症状であればこのどの先生に診てもらうのがよいのか、さらには、具合の悪い留学生に付き添って、その医療機関を訪ねるといような人的援助が提供できれば理想である。

(4) 提案事項

① チューター制の導入を

受け入れるからには、よりきめ細かいレベルで、個人的な関わりを数多く持たせることが必要だと感じている。

他大学で広く導入されているチューター制度（一人の留学生に一人あるいは何名かの日本人学生が付き、学生生活上のあらゆる一側面を援助するというもの）を、長野大学でも取り入れてみてはどうだろうか。異文化間の交流という側面でも、身近な、しかも同じ大学に在籍する留学生となら、日本人学生にとっても魅力的な仕事ではないだろうか。一年に限らず、半年ずつに期間を区切ることも可能であろうし、レポート

などを課して単位制にするのもよいだろう。長野大学での留学生の孤立化を防ぎ、日本人学生の活性化を図るためにも、意味のある試みではないかと思う。学生同士の日常的で細かな部分での接触の効果を期待したい。

② 優秀な留学生に積極的な援助を

日本語力については、すでにある程度のレベル(日本語能力試験一級の得点を参考にして)に達した者だけを受け入れ、入学後については、出席状況や成績に応じた形で積極的な経済支援をおこない、向学心を刺激することも必要だろう。大学はあくまでも勉学と研究の場である。最近の、一部の日本人学生の示す悪習をそのまま留学生に伝染させるのではなく、むしろ、優秀な留学生から日本人学生に良い意味での刺激を与えるという方向で考えるのも一方ではないかと思う。

③ 日本人学生の日本語授業への参加

日本語の授業が開講されるまでの3年間、日本人学生対象の一般教養科目「国語」を担当していた関係で、「日本語特別コース」開講当初、学部生の中に何人もの顔見知りの学生がいた。日本語教育に関心がありそうな学生に声をかけたところ、3名の学生が教室を訪れた。その時に留学生が見せたうれしそうな笑顔は、今も記憶に新しい。

教科書を離れた生きた日本語に、彼らは興味を持っている。教科書で学んだ日本語文型が、実際に通じるものかどうか、というよりも、それらを実際に日本人が使っているかどうかを確かめてみたいと思うのは、自然な欲求であろう。

指導者の立場としては、留学生側のこのような反応と同時に、日本人学生に、無意識に使っている日本語というものに対して、客観的にそれをとらえ、かつ説明できる(説明する努力をする)態度を養ってもらいたいのである。

教室での、とりわけ当大学のような、週一回のみの補修的な授業で、留学生の日本語力をのばすことには、かなり無理がある。読む、書くを中心とした書き言葉の学習は、ある程度自学自習で、辞書を頼りに進められるが、聞く、話す力に関しては、やはり、日ごろの実践に勝る学習方法はないだろう。そのためにも、日本人の話し相手が必要なのである。大家さんや隣近所の人といった、

ごくたまに形式的なあいさつや必要最低限の話をする相手ではなく、同じキャンパスに集り、同年齢の話し相手が必要である。

おそらく、欧米系の、あるいは、英語圏から来た留学生なら、もっと多くの日本人学生が興味を示すのであろうが、どうも、アジアの学生ということになると、日本人学生の反応は極端に鈍くなる。比較的近く国だとはいえ、生活習慣やものの考え方には大きな違いがある。日本人側からも、彼らの文化や習慣を学ぼうとする姿勢を示し、彼らからも、それぞれの国のことを話し、紹介する姿勢を示してもらいたい。そのためのきっかけになればと願い、当初二、三年、履修事項にも日本人学生の参加を募ったが、残念ながら、この後、日本人学生の教室参加は実現していない。

④ 日本人学生に向けての日本語の授業の開講を

あらゆる学問の基礎として働く日本語に関わる(スピーチや文章表現を主とする)授業が、四年制の大学に開講されていないのは、問題だと思う。日本人学生に、日本語での効果的な表現能力を身につけさせるための授業を開講すべき時期に来ていないだろうか。外国語学習を否定するものでは決してないが、しっかりとした日本語で自己表現の出来ることこそが、世界の人々と対等につき合う際の基本になる時代である。

現在、学校教育の場では、日本人に日本語を教えることを「国語教育」と呼び、外国人に日本語を教えることを「日本語教育」というふうに区別して用いているが、対象とする言語はどちらも「日本語」であることにはかわりはない。今こそ、双方の立場から「日本語」を学びあうことが求められている。「日本語教育」の視点からは、今までの「国語教育」の視点からでは見えてこなかった問題点が浮かび上がる。そして、そのことが、私たち日本人に新鮮な刺激となって、日本語を見つめ直すきっかけを与えるのである。

「日本語特別コース」の授業で、日本人学生と外国人留学生とが肩を並べて学習できることが理想である。しかし、それ以前に、日本人学生が自らの「日本語」をよりよく学ぶための授業が必要である。

5 日本語教室通信「心の声」発行の経緯とその意義

チューター制度もなく、日本語教室への日本人学生の参加も望めない状態で、どうにかして留学生の存在を広くキャンパスに知らせたいと考えて始めたのが、日本語教室通信である。日本語を実際に使って、日本人とのコミュニケーションをはかり、それによって満足感を得るという実体験こそが、最も大きな日本語学習の成果であろう。話し言葉では十分に表現できない留学生も、ゆっくりと考えて書いた文章の上でなら、多少なりとも満足のゆく程度に自分の考えを公表することが出来ると思ったのである。

留学生の中でも、日本語力が十分あり、学部生として一般の日本人学生の中にうまく溶け込んでいる場合はよい。外国人留学生ということで、担当の教官や他の受講生からも関心を持たれるであろうし、ある意味では、一般の日本人学生以上に発言の機会も与えられるだろう。問題は、日本語力の不足や、自信のなさから、どうしても黙ってしまいがちになる大多数の留学生である。それだけでなくアルバイトに忙しく、学内での存在感は非常に薄くなっている。学部生との接触機会の少ない聴講生や研究生の場合は、事態は一層深刻だ。

たとえ短い期間であろうとも、長野大学に在籍した事実は、当人にとって一生消えることのない事実である。そしてその間の印象が、将来にわたっての、日本に対する彼の印象を決定するのである。

長野大学日本語教室通信「心の声」は1995年に始まった。前・後期それぞれ2号ずつ発行し、1996年度末までに8号を発行した。毎号二百部程度を印刷し、図書館、学生課、教務課、教員控え室に配布している。「心の声」という通信の名称は、かつて研究生として在籍し、筑波大学の大学院に移っていった牛増強さん(1994年・1995年度研究生)の提案で決まった。ふさわしい命名であったと感謝している。

日本語教室を単立していった学部の3年や4年のOBやOGたちも楽しみにしているし、大学内の教職員の方々にも、留学生の思いを多少は理解していただけているのではないかと思っている。

学部留学生の参加するゼミで「心の声」が取り上げられたり、それがきっかけで日本人学生にも興味を持って読まれているということを知りにつけても、発行する励みにつながる。今後は、寄稿の形で、積極的な応援があることを期待しながら、留学生共々、「心の声」の発行を続けていきたいと思う。わずかな期間なりとも長野大学に在籍した留学生の存在証明のためにも。

6 教室外研修授業の実施

新学期が始まってしばらくして、授業も軌道に乗り、留学生の生活も落ち着いてくるのが、5月下旬である。その時期に一度、教室を抜け出して、外に出る機会を作ることにしている。車を持つ留学生はまだそれほど多くはないし、持っても、土地勘のない場所に一人で出かけるのには勇気がいるという彼らのために、希望を聞きながら、学外探索をする。といっても授業時間内という制限があるので、それほど遠くには出かけられないのだが、さしあたって、1996年度に実行したのが、「千曲川河川敷でのつけば料理体験」と、「秋の塩田平・前山寺おはぎ体験」である。初夏と秋の気候の良い時期に一度ずつ、教室を抜け出して、地もとの人々の生活の様子を見聞きし、同時に、普段教室では聞けない留学生の話に耳を傾けることにしている。

Ⅲ 地域の日本語教育の動向

筆者が、平成元年(1989年)度に、信州大学人文学部国語学教室の助手として留学生の日本語教育に関わった経緯は、人文科学論集第24号にまとめて発表した。当時、長野県内では、信州大学の留学生をはじめとして、外国人留学生が急速に増え、民間の日本語学校の開校が相次いだ時期でもあった。また、留学生や就学生に限らず、日系ブラジル人を中心とした在住外国人の急増に伴い、義務教育在籍児童を対象とした日本語教室の開設も相次いでいる。

この間、上田市に在任する筆者は、日本語教育に強い関心を持ちながら上田市周辺の動きを注意深く観察していた。中信、南信地方から、次々と自治体やボランティアによる日本語教室開設の動きが報告されるのに対して、東信、中でも上田市

内でその声を聞くことのないのを寂しく思っていた。民間日本語学校の長野外語アカデミー上田スクールが開校されていたが、非営利団体としては、上田カトリック協会の日本語教室が1991年から開設されているのみであった。

そんな中、上田市周辺では、昨年1996年から今年1997年にかけて、ボランティア団体による日本語教室開設が相次いだ。満を持してというべきか、ほぼ一時期に三つの団体が産声を上げている。(長野県下の日本語教育の動向については、上田女子短期大学日本語教育研究会の機関誌である『三郎山論集』大橋敦夫助教授の資料に詳しい。)

その中の一つであるボランティアグループ、にほんごくらぶ「さくら」は、毎週土曜日の午後1時30分から3時まで、創造館で日本語教室を開設している。一月のうち一度は文化交流会に当て、日本文化に関わる催しや講習会(生け花、お茶、お花見、折り紙教室など)を開いている。

ボランティアのメンバーは、日本語教育の経験のある数名を中心に、学生、一般社会人、定年退職後の男性など十数名で、毎回マンツーマン態勢で日本語の指導に取り組んでいる。若い女性が中心であるが、一般社会人の中に、二、三名の男性も含まれている。

受講生は、日系のブラジル人およびその家族が多いが、ほかに中国人、英会話学校の教師をするアメリカ、カナダ、オーストラリア人など、およそ十数名である。

使用テキストその他は、他のボランティア団体とも連絡を取り合いながら、学習者のレベルにあったものを選んで使っている。苦しい財政のもとに、参加者がそれぞれに工夫した教材を準備して教室を運営している。

場所の確保については、自治体の協力を得ているが、教材や文化交流会に要する費用については、参加者から実費を徴収している。

団体ごとに、目指すところは異なるようだが、「さくら」は、学習者への日本語力の支援もさることながら、ボランティア自身の日本語教育能力の推進を主たる目標に掲げて、日本語教授法の勉強会など研鑽に励んでいる。

Ⅳ 大学と地域の日本語教育

1 県下の情勢

長野大学に日本語特別コースが開設されて早5年目を迎える。1983年度に、政府が留学生10万人計画を発表して以来、日本語教育界は、めまぐるしい動きを見せてきたが、はたして今、そしてこの後、長野大学が日本語教育に果たす役割とは何であろうか。

かつて、あらゆるところで叫ばれた「国際化」が影を潜め、現在では、日常的に外国人が近隣に住み、生活を共にする時代である。単に教室で日本語を教えるといったレベルでの問題ではなく、日本人のだれもが同じ人間として、隣に住む一外国人とつき合っていかなければならない時代である。

長野県下の情勢、とりわけ東信地区では、Ⅲで述べたように自治体や公の教育機関よりも先に、一般市民、それもボランティアが率先して、外国人との接触に名乗りを上げた。

松本に本部を置く信州大学では、こうした社会情勢にいち早く対応するために、人文学部内に日本語教育関連の科目が開設され、留学生共々、日本語教育研究が盛んにおこなわれている。一方、長野大学の隣の上田女子短期大学では、例年、中国から二名の研修生を受け入れていることをきっかけに日本語教育にも力を入れ、平成7年度から、幼児教育課に「日本語教育」の講座を、国文科に「日本語コース」を増設している。信州大学、上田女子短期大学共に、日本語を研究する日本人学生と日本語を学ぶ留学生との間に、望ましい関係が築かれ、活気のある学園生活が見受けられる。

2 留学生会の結成

長野大学で現在問題となっているのが、留学生会の結成についてである。他大学や外部の交流団体から、留学生宛の誘いが相次いでいるものの、長野大学には、留学生会が存在しない。誘いの受付先がないのである。これでは、地域の外部団体との交流の機会が閉ざされてしまう。

二、三年前から、他大学の留学生会からの呼びかけもあり、結成されそうになりながらも、なか

なか実現にいたらない。中国人留学生の、グループ結成を嫌う考え方などにも原因がありそうだが、韓国からの留学生などは留学生会の結成に対して積極的である。

留学生会が、国際交流の核になって活動できれば、学内、学外での交流に際しても、また、外部団体との交渉の際にも好都合であろう。異文化交流の時流に乗り、長野大学の留学生にも地域団体からの交流の要請は数多い。外部団体主催のこのような催しに出席すれば、留学生一人一人が「長野大学」を代表する顔として働いてくれるのである。大学側から、何らかの援助の手がさしのべられないであろうか。

3 地域の日本語教育活動の拠点に

地域の日本語教育の活性化のためにも、地元の四年制大学である長野大学がリーダーシップを取ればと願っている。信州大学繊維学部の留学生は大学院生が多く、その研究は主に英語で行われている。また、本部のある松本で日本語教育が積極的に推進されている関係で、上田市内で積極的にリーダーシップをとる立場にはない。

すでに述べたように、近年、上田市周辺では、日本語教育のボランティア活動が盛んで、彼らは、勉強の場と参考図書を強く求めている。一般留学生の受け入れを積極的にすすめ、また、地域との共生、地域の人々の生涯学習の支援を志す長野大学であるならば、上田地区、ひいては東信地区での日本語教育の中核になるにふさわしいのではないかと考える。近々新築改装される長野大学附属図書館が、広く一般市民に開放されることを強く希望している。

幸い、ここ数年の図書費をもとに、かなりの日本語教育関連図書が集まりつつある。今後もこれ

が続けば、質、量ともかなり価値ある日本語教育参考図書やビデオ教材がそろうことになるだろう。

新築の大学図書館が、ボランティアで働く人たちの勉強の場になるとともに、日本語教育の実践の場としても活かされるならば、長野大学に所属する留学生にも、よい影響を与えるに違いない。地域の情報も入りやすくなり、地域の人々との交流の機会も広がっていくだろう。

おわりに

本来ならば一年ごとにその経緯を記し、細かな分析をおこなうべきところが、4年間という長い期間を一度に振り返るという無謀な企てで、雑な内容になってしまった。しかし、いずれにせよ、一度はまとめをしておかねば、次に進むことができない。

今回の作業を通して見えてきた問題点を基に、長野大学および周辺地域での日本語教育の活性化を願って、研究を進めるつもりである。

(1997. 7. 12 受理)

参考文献

- 金子泰子 「信州大学人文学部における日本語教育—日本語授業の実際—」『信州大学人文学部人文科学論集』第24号 1990年3月
- 『三郎山論集』(第1号、第2号、第3号、1994、1995、1996年) 上田女子短期大学日本語教育研究会・国語研究クラブ共同機関誌
- 田中 望/大谷晋也 『まちおこしの風景』株式会社傑 (いちい) 発行 1995年
- 『日本語学—特集 日本語教育の現在—』明治書院 1996年2月号
- 『日本語教育—21世紀への展望—』明治書院 (『日本語学』5月臨時増刊号 1997年5月 VOL. 16)